Osaka University Knowledge Archive

Title	ザンジバル島のスワヒリ語「方言」考 : 北部県における通婚圏調査から
Author(s)	竹村, 景子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2002, 12, p. 49-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71101
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ザンジバル島のスワヒリ語「方言」考

—北部県における通婚圏調査から—

竹 村 景 子

1. はじめに

スワヒリ語母語話者(その多くは、東アフリカ海岸地方および島嶼部に居住する)は、Kiswahili Sanifu(標準スワヒリ語;以下、「標準語」)をどのようなスワヒリ語であると認識し、日常の言語生活の中でどのように位置づけているのか、また、「標準語」と呼ばれる変種とその他のスワヒリ語変種(ここではいわゆる「地域方言」のことを想定している)との関係はどうなっているのか。筆者はその疑問を解明すべく、タンザニアのザンジバル島、およびペンバ島での調査結果を元に何度か論述を試みた。その結果、スワヒリ語母語話者の中には、「標準語」を規範言語としなければならないというような意識はあまりなく、多くの人が自らの母語である「地域方言」にさほどコンプレックスを持っていないことが明らかになった(竹村、1999 および近刊参照)。両島の学校教育では、「スワヒリ語」という教科を教える際、日本で「国語」が制定された後に各地で行なわれたような「方言撲滅運動」のごとき指導は行なわれておらず、「地域方言」を話す人々が、自分のことばは別のことばに比べて劣ったものであるといった感情を持つに至らないのだろう、ということが推測できる。事実、調査中に何人ものコンサルタントが、「私が話しているスワヒリ語が最も美しい」というフレーズを口にした。実際、就学年齢に達したグループの9割近くが学校教育を受けている(中途退学も含めて)と考えられる、30 歳代前半までの人々を除くと、Kiswahili Sanifu という用語がいったいどんなスワヒリ語のことを指しているのかさえ知らない人が多いのである。

しかし、「標準語」が何かを知らなくても、Kiswahili cha Mjini(ザンジバルタウン方言)のことは多くの人が知っている。これまでの何回かの調査の中では、このザンジバルタウン方言こそが「標準語」だと認識している人がかなり多く、この「地域方言」は他と比べて高いプレスティージを持っているのではないかと考えられた。1930 年に領土間言語(スワヒリ語)委員会がスワヒリ語の「正書法」を定めた際、その土台となる「地域方言」として選択されたのはこのザンジバルタウン方言であり、確かに、現在使用されている「標準語」の文法はそれに「似ている」かも知れない。ただ、「標準語」には様々な手が加えられていることは従来かなり指摘されてきたことであり[1)]、日常的に使用される話し言葉のレベルにおいては、書き言葉のように「標準語」の文法規則にしたがっているわけではない。いわゆる母語話者が話すスワヒリ語は、たとえそれがザンジバルタウン方言であっても、「標準語」とは異なる変種であり、彼らの認識—「標準語」とザンジバルタウンのことばが同じ—は、ずれて

いる。だが、それでもなお彼らがそのような認識を持つに至るのには、大阪府ほどの大きさの小さな島ではあるが、その島の中心地であり大陸側との交通の玄関口であるザンジバルタウンが、やはり彼らにとっては「都会」なのであって、そこで話されていることばを習得すれば、何らかの社会経済的恩恵にあずかれるのではないかとの認識があるからだと推測される。となれば、その他の「地域方言」は、方言分類上は同列に扱われても、社会的に見ればザンジバルタウン方言よりも下級言語として存在しているのではないかとも考えられる。さらには、島内でザンジバルタウン方言とその他の「地域方言」のダイグロシア的状況が考えられるかも知れない。

本小論では、以上のようなことを踏まえて、「標準語」に対するスワヒリ語母語話者の言語意識や言語態度の問題をこれまで以上に考察する前に、ザンジバルタウン方言とその他の「地域方言」の関係がどのようなものであるかを見ていくことにする。これらの関係の上に、さらに「標準語」と「地域方言」との関係が覆いかぶさっているのかどうかを検証するのは後の課題とすることにして、今回は、ザンジバル北部県北部A郡において行なった「通婚圏調査」をもとに、「方言」同士の接触状況や母語話者のザンジバルタウン方言に対する意識を明らかにすることを目指す。

2. 調査の概要と目的

筆者は、1998年10月15日から22日にかけて、ザンジバル北部県北部A郡(以後A郡)の8村(ヌングィ(Nungwi:NG)、チャアニ(Chaani:CH)、キドティ(Kidoti:KD)、マテムウェ(Matemwe:MT)、ムココトニ(Mkokotoni:MK)、キベニ(Kibeni:KB)、ムクワジュニ(Mkwajuni:MJ)、ガンバ(Gamba:GB)。以下略号を用いる)において、表1の質問票を用いて、通婚圏に関する聞き取り調査を163人のスワヒリ語母語話者に対して行なった[2)]。表2には、各村のコンサルタントの年齢層と性別を示してある。表中、横軸の「20M」は20歳代の男性、「10F」は10歳代の女性を表わす。縦軸には村名を略号で示した。

A郡では、ザンジバルタウンから続く幹線道路の舗装工事がおよそ20年前から行なわれており、1998年現在ではKDまで完了していた。島の最北端の村であるNGまでの工事が完了するまでには、まだ時間がかかるように思われたが、島民の重要な交通手段である乗合バスの「ダラダラ(daladala)」は、舗装が完了していないのにもかかわらず、ヌングィまでも日に何本も走るようになっていた。このことから、幹線道路の舗装工事が始まる前よりも人々がタウンと村々を行き来する頻度が高くなったのではないかと考え、通婚圏の広がりにも何らかの影響を及ぼしているのではないかと予想した。また、ザンジバルは1964年にタンガニーカと合邦してタンザニア連合共和国となったが[3)]、独立以前からかなり長い間、島民の中には大陸側の人間に対する不信感や差別感がか

<表 1>スワヒリ語話者の通婚圏に関する質問票

1. あなたの出身地はどこで、何語/何方言(どこの地域のスワヒリ語)が話せるか(話せる順に並べる)。
2. 配偶者の出身地はどこで、何語/何方言(どこの地域のスワヒリ語)が話せるか(話せる順に並べる)。
3. 配偶者とは初めどのように出会い、どういう経緯で結婚に至ったか。
4. 新婚当時、お互いのスワヒリ語が異なると思ったことはあるか。何が違ったか。それによって何か問題が生じたか。
5. 子供は何語/何方言(どこの地域のスワヒリ語)を話しているか。スワヒリ語であれば、それは「あなた自身のスワヒリ語」と違ってきているか。
6. 幹線道路ができる前とできてからでは、通婚圏が違ってきていると思うか。それはなぜか。
7. 学校教育を受けたか。受けた人に:「あなた自身のスワヒリ語」と学校で使われているスワヒリ語は違ったか。
8. ザンジバルタウンのスワヒリ語を知っているか。知っている人に:なぜ知ったか。それを話せるか。子供はどうか。

<表2>コンサルタントの年齢層と性別(単位:人)

	20M	30M	40M	50M	60M	90M	10F	20F	30F	40F	50F	60F	70F	80F	計
NG	4	2	0	2	1	0	0	1	3	5	1	0	1	0	20
CH	1	3	0	0	0	0	0	4	3	3	4	1	0	1	20
KD	3	3	2	0	2	0	1	6	2	0	1	0	0	0	20
MT	7	0	2	0	2	0	0	4	2	0	3	0	0	0	20
MK	0	7	4	2	5	0	0	0	2	0	0	0	0	0	20
KB	0	1	0	0	4	0	1	3	6	3	2	1	1	0	22
MJ	1	1	2	0	1	0	0	4	2	0	0	4	5	1	21
GB	1	0	0	0	1	1	1	5	2	2	2	4	0	1	20
計	17	17	10	4	10	1	3	27	22	13	13	10	7	3	163

なりあったとされ、また、ペンバ島の住民との間にも確執があったとされる[4)]。1998 年現在では、大陸側との交通状況は、ダルエスサラームとの間に日に 6 便以上の連絡船があり、小型飛行機も 3 便はあり、大陸と島の交流は合邦当時とは比べ物にならないほど盛んである。ペンバ島との間にも定期船が日に数本出ており、こちらの交流も筆者が 10 年ほど前に初めてペンバ島に渡った頃とは比べ物にならない。大陸側やペンバ島との間にかなりの確執があった頃は、村の「外」の人間との婚姻は極端に避けられていたようであり、つまり、ことばも村の中で用いられる変種が保持される

状態にあったと仮定できる。

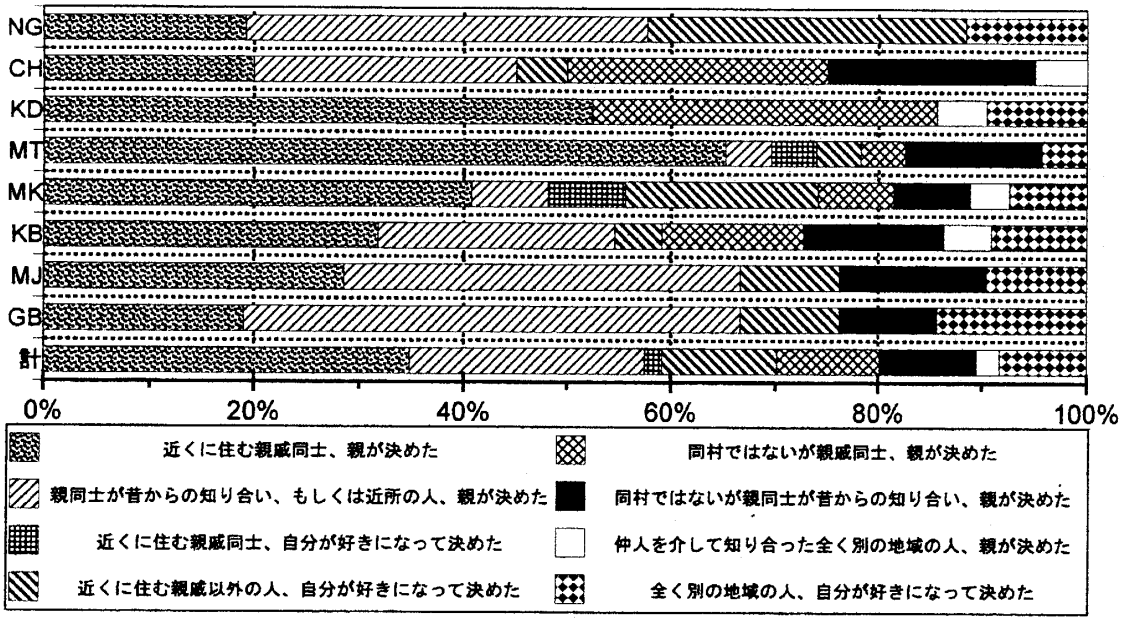
人々の交流の仕方が変化した現在、通婚圏の広がりを見ていくことでことばの接触状況を把握し、言語保持の状態と言語変容のスピードを明らかにすることが目的の一つであった。また、既述したようにタウンへの人の流れが盛んになっていることから、ザンジバルタウン方言に接する機会も増えていることが考えられ、その変種をどのように意識しているかも探ってみることがもう一つの目的であった。

3. 調査結果

3. 1. 通婚圏の範囲

まず、実際に通婚圏がどの程度の範囲まで広がっているのかを確認してみる。質問項目3の回答をまとめた図1を見てみよう。

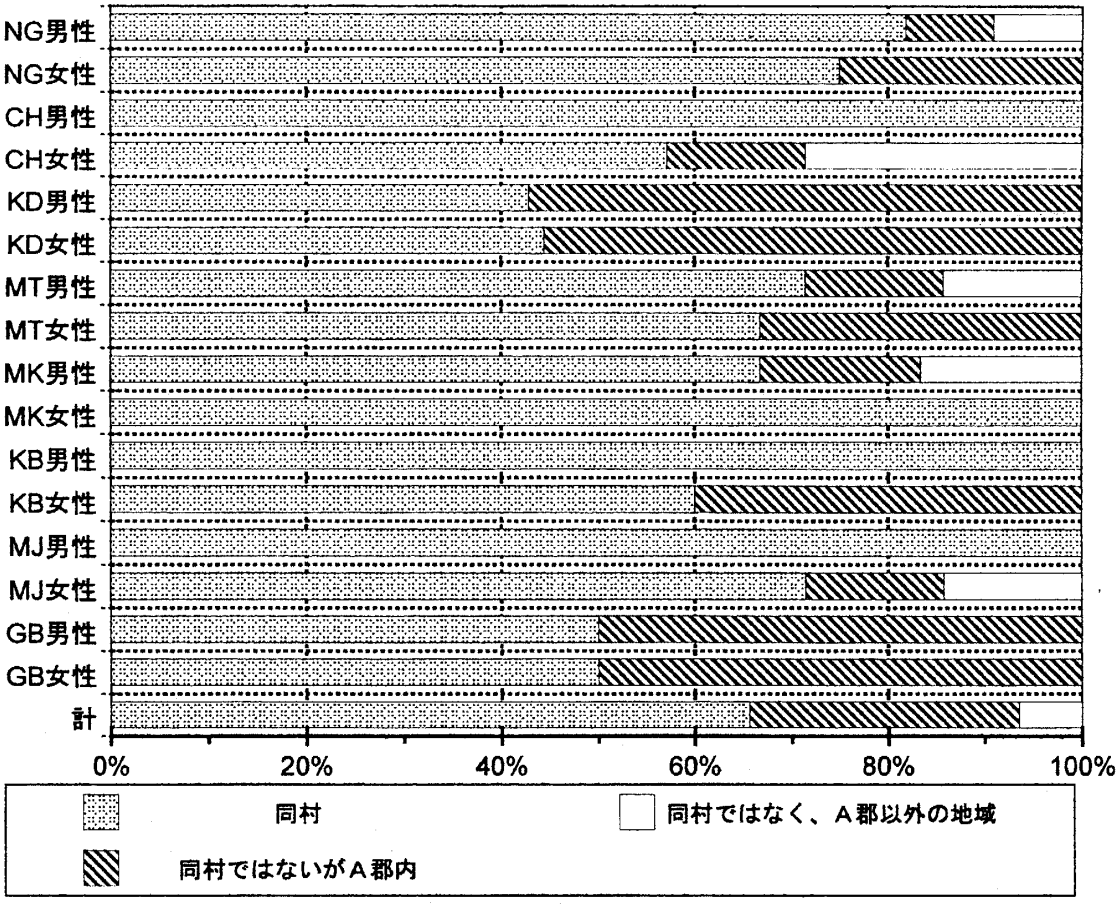
<図1>結婚に至るまでの事情



2人以上の妻を持つ男性がいたために合計数は181人となっているが、この図から顕著なのは、結婚を親が決めようと自分の意思で決めようと、相手が同村の人である場合が圧倒的に多い(約70.2%)ことである。また、「配偶者は同村の出身ではない」という人でも、大方がごく近くの村、それもA郡内の村出身である場合がほとんどで、ザンジバル島中部やペンバ島、大陸側海岸部のタンガの出身者がごく少数いた他は、ザンジバル南部の出身者および大陸側のスワヒリ語を母語とし

ない人は一人もいなかった。この 10～15 年間ほどで、全体の結果と比べて何か違いが現われるかと思い作成したのが図2であるが、30 歳代の男女合わせて 93 人のうち、結婚相手が同村出身でもなくA郡内の地域でもなかった人は合計で 6.5%足らずであり、若い世代だからといって「外向き」の傾向があるのではない。コンサルタントのうち、最高齢者が 90 歳代の男性であることから考えると、ここ 70 年ほどの通婚圏はそれほど広がっておらず、かなり保守的な傾向が強いことがわかる。

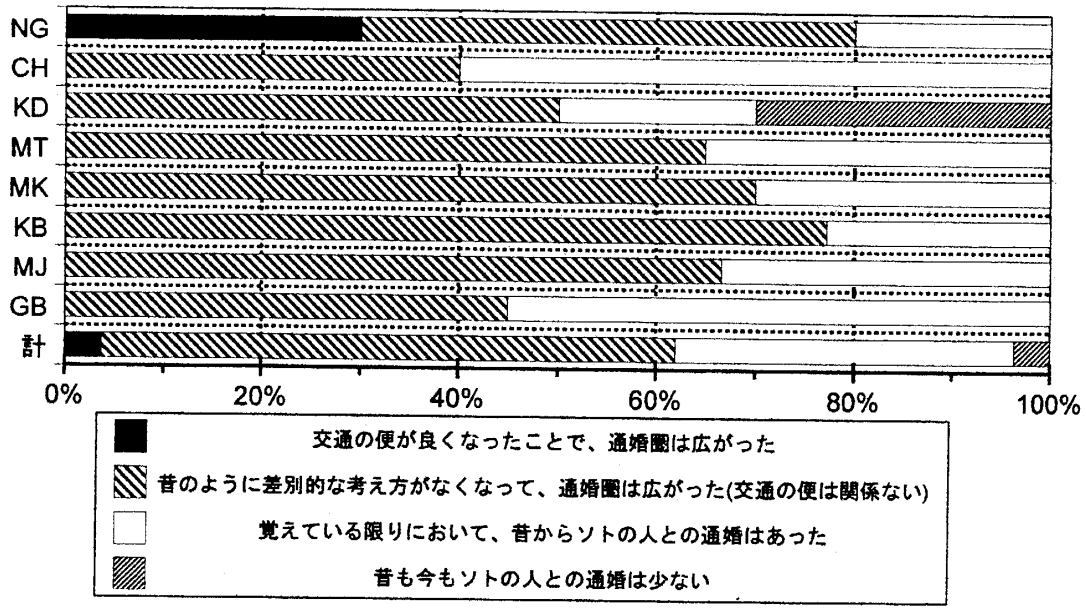
<図2>30 歳代までのコンサルタントの結婚相手の出身地



ところが、質問項目6の結果をまとめた図3からわかるように、人々の意識は実際の通婚状況からはかなりずれている。6では、通婚と交通事情の変化の相関関係を尋ねたつもりだったが、予想とは異なり、交通事情が良くなったことと通婚圏の広がりに関係性を見出している人はほとんどおらず(全体で3.7%弱)、その全てがNGのコンサルタントだった。これにはやはり、幹線道路の開通が大きく影響していると考えられる。驚いたのは、「「昔からどこの人とでも結婚できた」と答えたコンサ

ルタントがかなりいたことで、全体の34.3%強を占めた。それに加えて、「昔も今もソトの人との結婚は少ない」とした人は全体で3.7%弱であり、逆に、「昔とは考え方が違って、どこの人とでも結婚できるようになっている」とした人が 58.3%強に上ったのである。多くのコンサルタントが「昔とは考え方が違っている」と認識している最大の理由は、「若者は親の言うことなど聞かず、村のソトに勝手に出て行って自分たちで結婚相手を見つけてくることが当たり前になり、親もそれを反対できなくなった」ことであるとしているが、図1の結果から明らかなように、親が決めた同村出身の相手と結婚した人は全体で 57.4%弱にも上り、同村出身という条件をはずした場合には、親に決められた結婚をした人は実に79%にもなる。

<図3>通婚状況の変化に関する認識



以上のことから、通婚圏の範囲は今のところ北部県内までで納まっていると考えてよいだろう。ただ、人々の人的交流に関する認識は、たとえば「昔はソトの人との結婚は考えられなかった。大陸に行くと殺されるなどと言われていた。今は、何の恐れも差別も問題もなく、どこの人とでも結婚できる」、「最近は「文明化」して、どこの人と結婚しても何の問題もないことがわかってきた」、「教育の影響や、村以外の地域への出稼ぎが増えた影響などで、差別感が少なくなってきた」といった意見が示すように、さほど「内向き」であるわけではない。今回のコンサルタントたちの中にも、ザンジバルタウンをはじめとして、ペンバ島、大陸側にも仕事で赴いたことのある人が少なからずいたことを考えると、人々の認識を通婚とは切り離してとらえるのが妥当であるように思われる。

3. 2.「方言」接触の有無

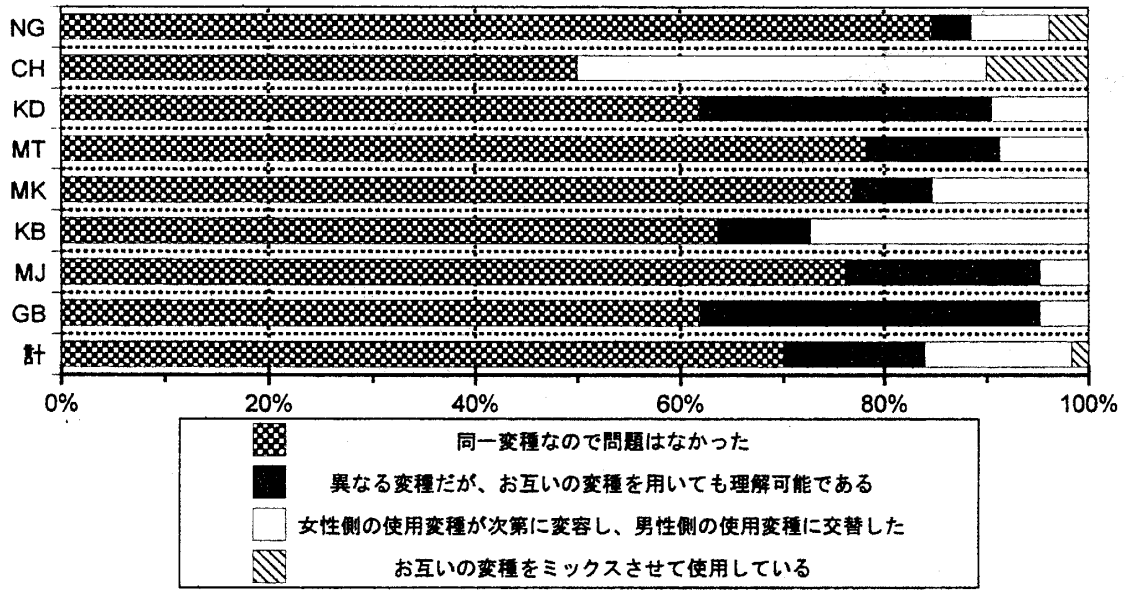
前項で見たように、通婚圏の広がりはせいぜいA郡内にとどまっているのだが、このことと「方言」の接触にはどのような関係があるだろうか。

まず、ここで言う「方言」とは何を指すかを明らかにしておかねばならない。そもそも、今回の調査地域であるA郡は、いくつかの先行研究によれば、地方方言の中の「トゥンバトゥ方言(Kitumbatu)」が話されているとされる地域である。NURSE & HINNEBUSCH(1993:11)には、「この「方言」は、主にはザンジバル島北西に位置するトゥンバトゥ島およびザンジバル島のムココトニ湾岸地域で話されている。また、ペンバ島南部とマフィア島および大陸側のタンガの北側にも若干の移民がいる。1967年のタンザニアの人口センサス(タンザニア政府資料としては1971年に発行)では、ペンバ島の6000人と他地域の1500人を含み、53000人の「トゥンバトゥ方言」話者がいるとされる」とある[5)]。調査中に、「自分の話すスワヒリ語は正真正銘の「トゥンバトゥ方言」ではないが、この村流の「トゥンバトゥ方言」である」[6)]と話したコンサルタントが数多く存在し、実際、A郡にはトゥンバトゥ島からの移住者が建設したという村が多いことから、この地域の主要方言はトゥンバトゥ方言であると理解していいだろう。しかし、各村で話される「トゥンバトゥ方言」が、トゥンバトゥ島で話されている変種と全く同一のものであるかどうかの確認ができておらず、また、既述のようにコンサルタントたちの間では、同じトゥンバトゥ島出身の流れを汲みながらも、各村のスワヒリ語は少しずつ異なると認識されていることから、「トゥンバトゥ方言」を上位変種とする、いくつかの下位変種が存在する可能性も否定できない。今回は、そういったことを裏付ける言語学的調査は行なっていないが、ここでは「方言」の意味に幅を持たせ、あくまでもコンサルタントたちの意識を中心に、それら「下位変種」と考えられるものまでも含めて、「方言」接触の状況を考えることとする。

図4には、質問項目4の結果をまとめてみた。結婚後、お互いが日常使用するスワヒリ語が異なっていることに気付いたかどうか、異なっていた場合、コミュニケーションをはかる上で何か問題が生じたかどうかを尋ねた質問だが、ここで興味深いのは女性の使用変種の変化である。3. 1. で見てきたように、同村間での通婚が多いために、夫婦の使用変種が同一の割合が最も高い(70%)のは当然のことだが、配偶者が同村出身ではない場合、女性が自らの変種を夫の変種に交替させたという回答が、全体で 14.4%強にも上った。同村出身ではないと回答した中の割合では、実に半数近くの 48.1%強にもなる。たとえば、男性が自分の出身の村とタウンに配偶者を一人ずつ持っている場合、タウンに住む配偶者は「ザンジバルタウン方言」を使用するが、村に住む配偶者(同村の出身ではない)は、自分がもともと話していた出身村の変種ではなく、現在の居住村の変種を多用していくようになるというのである。このことに関して、他地域/他村出身の女性を配偶者

に持つ男性、もしくはそういった女性本人から、「もう生まれた村の変種は覚えていない」とか、「結婚当初はお互いの変種を使っていたが、次第に男性側の変種に慣れてそちらに交替していった」などという回答が得られている。つまり、通婚による「方言」接触は、非常に少ないながらも存在し、そして、接触後に生じるのは多くの場合、女性が使用する変種の交替である、ということが言えるだろう。また、女性が自分の出身村の変種を結婚後の居住村の変種に交替させるということは、居住村の変種が保持される傾向にあることを示し、加えて通婚圏の広がりがほとんど見られないことから、村の変種変容に通婚が及ぼしている影響は極めて小さいのではないかと考えられる。

<図4>結婚後にお互いの変種の相違によりもたらされた問題、および使用変種の変化の状況



3. 3. 言語保持に対する意識

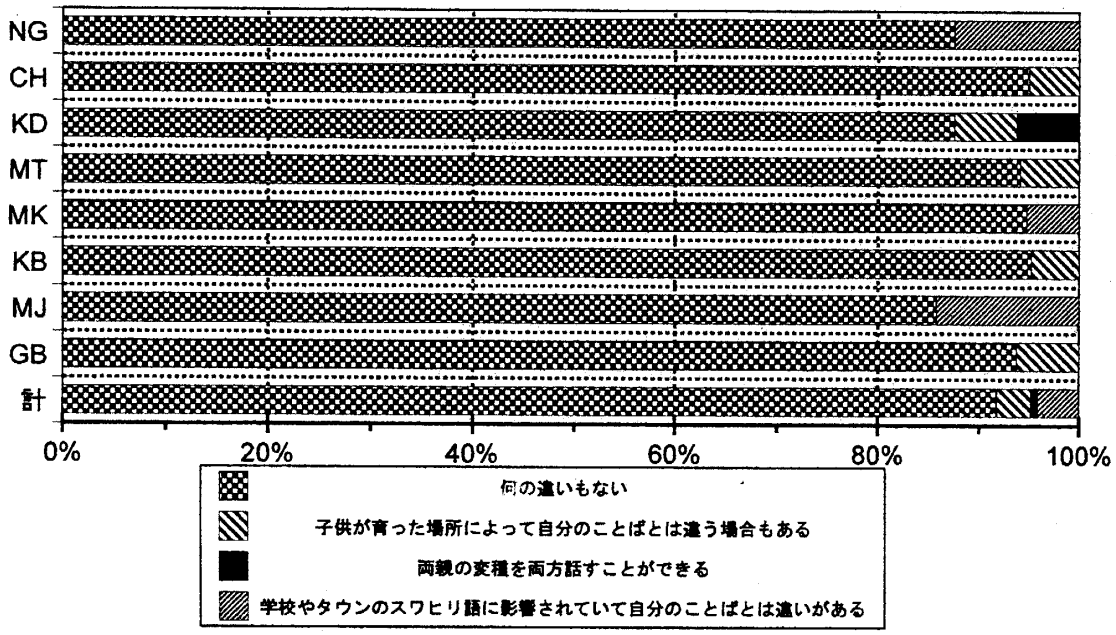
では、村での言語保持に関して人々はどのような意識を持っているのだろうか。まず、質問項目5をまとめた図5を見てみよう。自分の子供たちが日常用いているスワヒリ語と、自分の用いているスワヒリ語が異なるかどうかを尋ねた質問であるが、「自分のことばと子供の話すことばには何の違いもない」とした人が全体では 91.8%を占めた(子供がいない人もいたので、合計数は 146 人)。したがって、人々の意識の上では、世代が一つ変わっても「方言」は急激には変容しないものだととらえられていると考えられる。しかし一方で、ごく少数ではあるが、子供の用いることばが「学校で別のスワヒリ語を習っているせいで自分たちのスワヒリ語とは少しずつ違ってきている(下線筆者)」、「タウンに住んでいる子供たちは町ことばを話し、村のことばを話さなくなっている」、「子供たちはタウンのスワヒリ語を真似ようとしている」などの回答も得られている(全体の 4.1%)。つまり、「学校で

習う別のスワヒリ語」や「町ことば」といった変種に何らかの影響を受けて、自分たちの変種が変容する危険性を認識している人もいることがわかる。

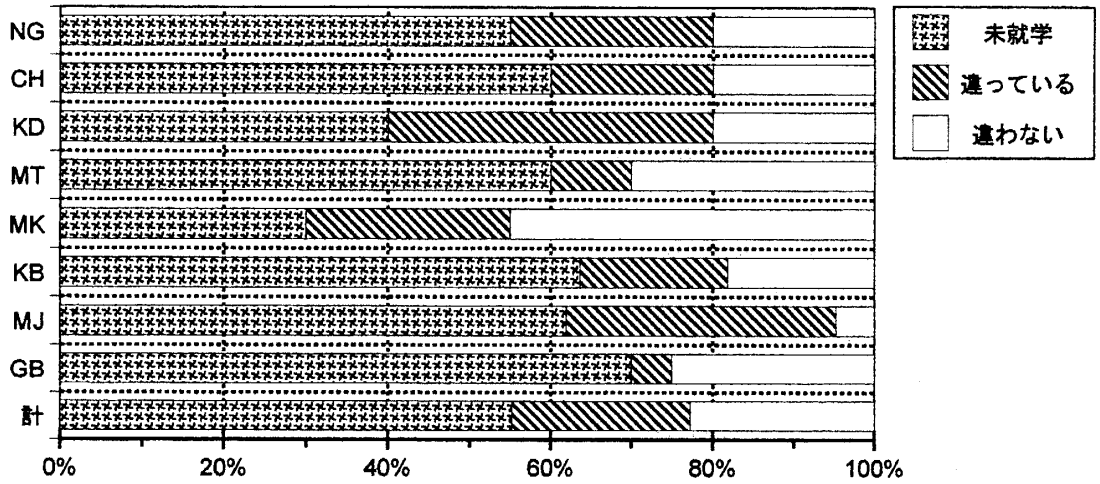
実際、チャアニ村における参与観察では、図5の結果とはいささか異なる状況が見られた。老年層(70 歳代)が話すチャアニ変種と、若年層(10 歳代後半)の話すそれとでは、語法や語彙に顕著な差異が見られたからである。さらに、壮年層(50 歳代)の人でも、老年層が使う語彙で意味がわからないものがあった。ザンジバル革命政府の 1998 年のセンサス(調査当時未公刊の資料)によれば、若年層は9割以上が少なくとも小学校には就学しており、つまり、「スワヒリ語」という教科の授業では「標準語」の文法をきちんと学び、また、英語を除いた他教科も(名目上は)「標準語」で学んでいるわけである。若年層の発話の全てにおいて「標準語」化が進行しているとは言い難い。しかし、親の世代が危機感を持たずにいる間に、「発展」や「流行」を追い求める若者たちの「タウン熱」—タウンに行けば、観光客と接して外国文化に触れられる、金儲けができる、海外に行くこともできるかも知れない—の高まりで、「ソト」とのコミュニケーション手段として重要な「ザンジバルタウン方言」を身に付けようとしている可能性は否定できないのではないだろうか。

ところで、「学校で習う別のスワヒリ語」のことを、彼らはどのように認識しているのだろうか。質問項目7では、学校で使用するスワヒリ語と自分が日常用いているスワヒリ語との違いを尋ねている。図6にまとめた結果でわかったことは、就学者(成人教育を受けた人も含む)の約半数がそれらの違いを認めていることである。「違った」という人に、どのような点が違ったのかをさらに尋ねると、「明らかに語彙が違った」、「先生がタウン出身の人で、使用する語彙が全然違った」、「学校では Kiswahili Safi(きれいなスワヒリ語)を使い、自分のスワヒリ語は田舎言葉である。音や語彙が違う」、「学校では美しいスワヒリ語だった。汚いことばを使わなかった」、「学校のスワヒリ語は、家でのスワヒリ語のようにただしゃべればよいというわけではない。きちんと規則に従わねばならない」、「学校のスワヒリ語は Kiswahili cha Kiingereza(英語的なスワヒリ語)だった」、「学校では多くの子供がタウンのスワヒリ語を使っていた」という回答が得られた。既述の通り、学校教育で「方言札」などを使った「方言矯正」の指導が行なわれている事実はないので、ここに挙げられた意見はコンサルタントたちの言語認識と考えてよいだろう。となれば、彼らの中で「学校のスワヒリ語」は自分たちの「方言」よりも「美しい」ものであったり、「規則的」なものであったりするととらえられており、少なくとも「学校」という公の場で用いられるスワヒリ語の方が、家で日常用いているスワヒリ語よりも何がしかの「価値」が付与されているように感じられているということである。加えて、「タウンのスワヒリ語」と同一視している人がいることから、やはり、ザンジバルタウン方言を特別視する態度が現われているように思う。そのことを、次節で確認してみよう。

<図5>子供たちの変種との違い



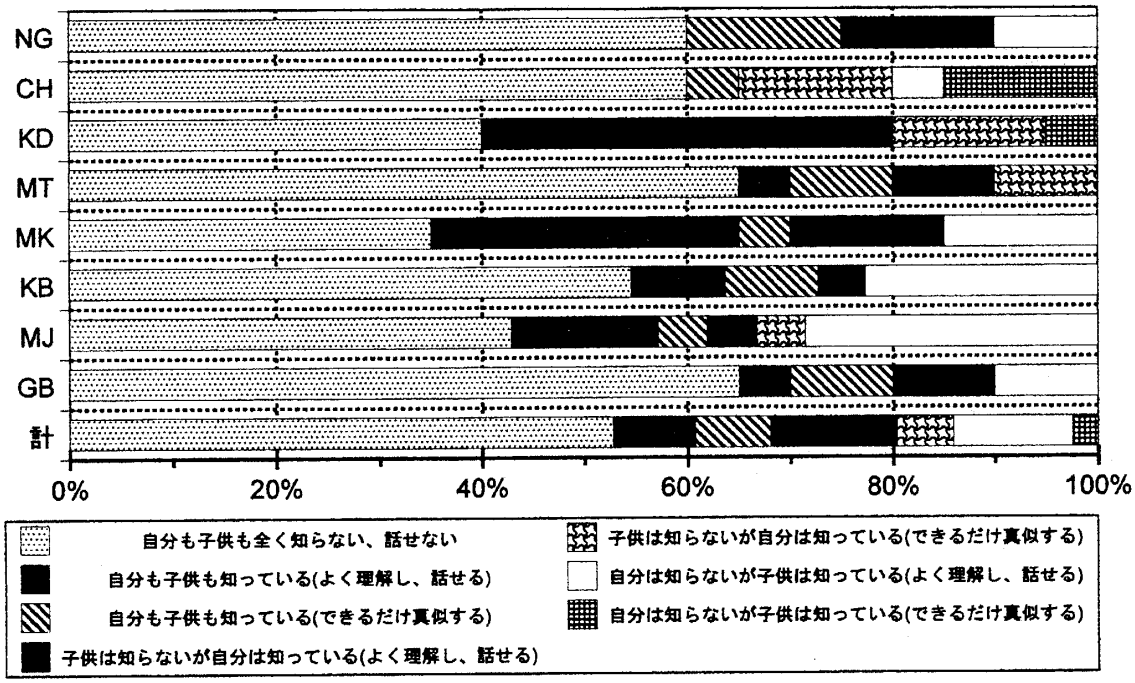
<図6>学校のスワヒリ語と自分のスワヒリ語との差異の認識の有無



3. 4.「方言」話者の言語態度ーザンジバルタウン方言に関して

質問項目8では、「ザンジバルタウン方言」を知っているかどうかを尋ねている。これは、通婚圏の問題とは関係ないが、先行研究や今回の参与観察で、タウンとは明らかに使用変種が異なることがわかっているA郡において、人々が自分たちの変種とタウンの変種の違いを認識しているか、そして、認識した上でどのような言語態度を示すかを確認するためのものだった。図7に結果をまとめてみた。

<図7>ザンジバルタウン方言に関する知識の有無



「自分も子供も全く知らない、話せない」という人が、全体の 52.7%強を占めているが、年齢別や性別で見た場合、「話せない」率は老年層で女性である場合に最も高くなる。男性の場合は、老年層であっても、仕事でタウンに出たことがある人は「タウンではできるだけ真似する」という回答をしている場合がある。コンサルタント本人が「よく理解し、話せる」という割合が全体で2割強になっており、さらに、「できるだけ真似する」という人まで合わせると全体の3分の1にもなる。その数は 54 人だが、そのうち 1 人を除いては「タウンでは必ずこのことばを使う/真似する」としている。彼らの回答の中には、「タウンでは田舎のスワヒリ語が通用しない」、「仕事でタウンに行っているから、向こうではそれを使う」、「子供は学校に行って習っているから知っている」、「Kiswahili Sanifu はタウンのことばだから知っている」、「最近はタウンのことばがどこにでも広がっているから知っている」という表現が見られる。このように、タウンではできる限りザンジバルタウン方言を使用する方が良いと考えていることや、ザンジバルタウン方言が自分たちの村の「方言」とは異なり、より広い範囲で通用することばであると認識していることを示す回答が得られていることから、彼らがザンジバルタウン方言にある程度のプレスティージを与えているのではないかと考えられる。

4. おわりに

シュリーベン=ランゲ(1990:120)は、「個々の話し手は基本的に複数の言語ないしは変種を用い

る能力をもっており、したがって、ひとつの言語のいくつかの変種をつかう、ないしは少なくともみわける能力をもつことは、人間の本質的な能力」だと述べている。A郡での調査で「話せることば」を尋ねた際、複数の変種を回答するコンサルタントが多数[7]であった。このことに関連して、「一つの変種しか話せない」から「多数の変種、あるいは言語が話せる」までの能力の差には、学歴の有無、レベルや現在の居住地、転居の回数などが関係していることは、すでに拙論(竹村、1999:12)で指摘した。しかし、「一つしか話せない」と回答した人でも、自分の村のことばと、出身村が異なる配偶者の使うことばが違うという認識ができているのであり、タウンのことばとの違いも認識できるのである。筆者は、「スワヒリ語」として一つにくくられているこのことばが、実は幾重にも変種が折り重なってできあがっている「重層的言語群」であることを確認し、その母語話者たちが、自分の周りにあるいくつかの変種の中から、場面ごとに最適と考えられるものを選択して用いていることを確認したいと考えてきた。今回の調査では、少なくともザンジバルタウン方言とA郡内の「方言」との違いや、ザンジバルタウン方言の優位性が認識されていることが確認できたと言える。ただ、通婚圏に着目したにもかかわらず、それが「方言」同士の接触にはほとんど影響を与えていなかったため、今後、「方言」接触やそれに伴うことばの「変容」や「保持」といった問題を明らかにするための、新たな調査を考えねばならない。また、「方言」と「方言」の境界線をどこに引くのかという問い、具体的には、スワヒリ語母語話者が「感覚的」に「違う」と回答している各村の変種が「方言」と呼べるものかどうかという問いに対して、科学的な論拠を求めなければならない。

現在、ザンジバルタウンにはますます多くの大陸出身者(スワヒリ語を母語とせず、学校で習得した人々も多く含まれる)が訪れていると聞く。つまり、ザンジバル側の人々が「Kibara(内陸弁)」と呼ぶことばとザンジバルタウン方言との接触が十分考えられる。そこで変容が起きるのか、起きたとして、変容したザンジバルタウン方言がA郡やその他の郡部へ広まっていき、人々の言語意識や態度—「方言」間の序列の付け方や場面による使用変種選択の在り方など—に何らかの影響を及ぼすのか。そういった事象に着目しつつ、スワヒリ語の中の多様性を明らかにしていく作業を継続することが筆者の課題である。

【注】

1) 宮本(1989:157-160)には、「標準語化の言語的事実」として、様々な変化が例示されている。その上で、「スワヒリ標準語は、既存のどの方言よりも、①接続詞 ②不定法 ③指示代名詞・人称代名詞(独立形と目的格形) ④繋辞 ⑤関係接辞(代名詞的および副詞的)を多用し、⑥名詞と副詞の間の機能分化を促進していることが容易に見てとれるだろう」(同:160)と述べてある。

2) 本調査は、文部省科学研究費補助金(国際学術研究)による調査「東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシティの構造[代表:宮本正興]」の第3年次調査の一環である。A郡での調査期間は1998年10月15日～22日である。なお、質問票を用いての面接調査の際、媒介言語はスワヒリ語を使用した。

3)「ザンジバル」と表記した場合、それはザンジバル島(スワヒリ語では kisiwa cha Unguja)、ペンバ島(スワヒリ語では kisiwa cha Pemba)、およびいくつかの島々からなる地域を指し、「ザンジバル島」とは区別する。

4) 富永(2001:197-210)では、ザンジバル島とペンバ島の間にある確執について、イギリス統治期における植民地当局のクローブ産業への介入のあり方と絡めて論じられており、非常に興味深い。この時期の政策が、結果的に1964年のザンジバル革命における両島のアフリカ人のアラブ人に対する態度の違いを生み出す遠因になったことが指摘されている。1992 年の複数政党制導入後の両島の政治的対立も、もとはと言えばこの時期からの対立がくすぶっていたことに起因しているとの指摘もある。

5) STUDE(1995)には、トゥンバトゥ島の歴史的背景についてやや詳しい記述がある。さらに、1988年のタンザニア人口統計の資料を基に、トゥンバトゥ島の人口が 7951 人であるという記述も見られる。この論文では、著者が実際にトゥンバトゥ島で行なった調査をもとに、「トゥンバトゥ方言」と「標準語」の語彙や音韻の相違などを示し、かつ、ザンジバル島南部の主要方言である「マクンドゥチ方言(Kimakunduchi)」の語彙との近似性についても言及している。著者は、「標準語」がザンジバル島内にどんどん広がりつつある中で、トゥンバトゥ島は海によって孤立した状態にあるため、その影響を受けにくい状況にあるとし、島民の言語使用に大きな変化がまだ見られないと指摘しており、興味深い。

6)「あなたは何語/何方言(どこの地域のスワヒリ語)が話せますか」という問いに対して、「Kitumbatu cha Chaani」や「Kitumbatu cha Mkwajuni」という回答があり、それらは各々「チャアニのトゥンバトゥ方言」、「ムクワジュニのトゥンバトゥ方言」という表現になる。

7) ただし、コンサルタント本人が「～方言」という言い方をし、a 村のことばと b 村のことばが異なると認識していても、既述のように先行研究では全て「トゥンバトゥ方言」としてまとめられている。

【参考文献】

NURSE, D. & T. J. HINNEBUSCH. 1993. *Swahili and Sabaki: A Linguistic History.* University of California Press.

宮本正興. 1989.『スワヒリ文学の風土』大阪外国語大学アフリカ研究室.

シュリーベン＝ランゲ, ブリギッテ. 1990.『社会言語学の方法』(原聖、糟谷啓介、李守訳)三元社.

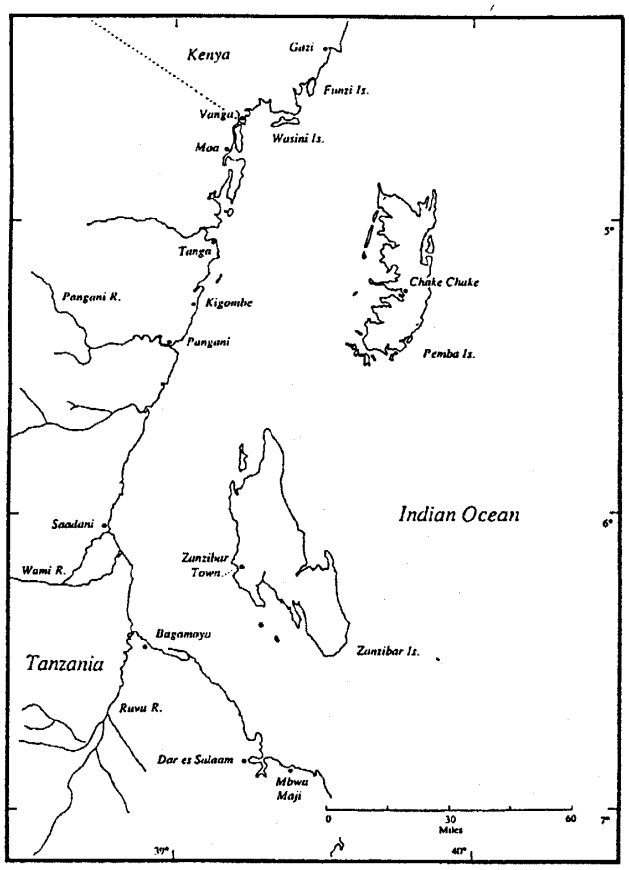
STUDE, Traute. 1995. 'Language Change and Language Maintenance in the Island of Tumbatu' *Lugha, Utamaduni na Fasihi Simulizi ya Kiswahili.* pp.83-117. TUKI, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.

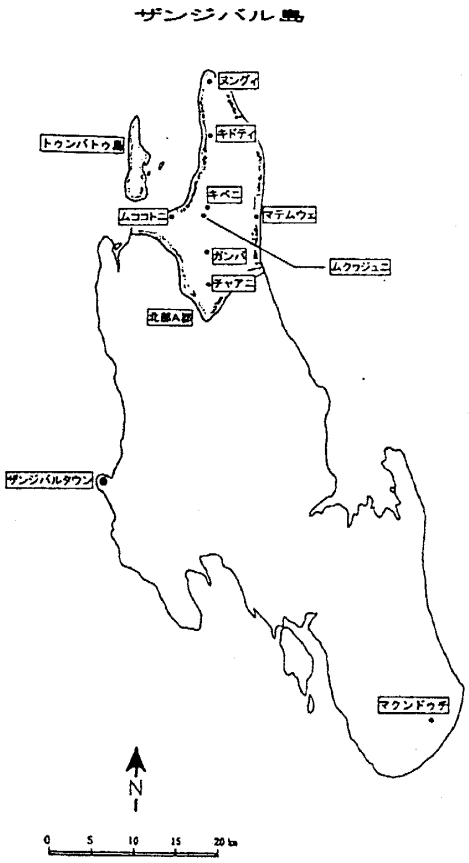
竹村景子. 1999.「「方言」と「標準語」－スワヒリ語話者の言語意識調査から－」『アフリカ研究』第55号. pp.1-20. 日本アフリカ学会.

——. 近刊.「一つの言語とは何か－ザンジバル島における「方言」と「標準語」の間－」『現代アフリカの社会変動－ことばと文化の動態観察－』(宮本正興、松田素二編)pp.194-219. 人文書院.

富永智津子. 2001.『ザンジバルの笛－東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化』未來社.

【参考地図】





NURSE & HINNEBUSCH 1993:43